

井戸端だより

第87号

発行日： 2014. 9. 24

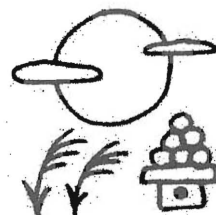
発行： ぐらしの学習会

東温市恒例の観月祭が終わると、見奈良のコスモス祭りが始まる。作物は連作を嫌うと聞くが、今年の花はどうだろう。東温市に来てくださる多くのお客さん方に、来年も又という満足感を持っていただけるような花だといいいのだが。

我が家の一大行事の稲刈りを漸く終えることができた。長雨と台風の影響を受け、半分以上の稲が倒れていて、どうなることかと思っていたが、案の定、例年の倍以上の時間がかかった。しかしながら、刈取りの終えた田を見ると、安堵感でいっぱいだ。

会報担当は今回で二回目。パソコン作業の途中、何かと上手く事が運ばないことがあったが、メールや手渡しされた会員の声を皆様に届けなきゃあという気持ちに助けられた。会報作りの後の、郵送使用の切手購入の楽しさも知った。日本の切手の美しさや種類の多さは素晴らしい。皆様、87号をお届けします。

も く じ



- | | | |
|---------------|-----------|-------|
| ・ 例会報告 | 7月 | P. 2 |
| ・ ジャコウアゲハ | 2014. 6~9 | P. 6 |
| ・ 満州 (鞍山) の終戦 | | P. 7 |
| ・ 父の姿 | | P. 9 |
| ・ 短歌 | 4首 | P. 10 |
| ・ 高齢者施設見学 | | P. 11 |
| ・ 雑がみ | | P. 12 |
| ・ 行ってみたマレーシア | | P. 14 |
| ・ 雑感 | | P. 22 |
| ・ お知らせ | 86号訂正 | 編集後記 |



7月例会報告

7月19日(土)「オオツノカメムシ」の餌となる「ケンボナシ」が面河山岳博物館付近で見られるとのメンバーKさんの情報、丁度この日から特別展「ホネものがたり」が始まるとの情報、時間が許す範囲でKさんお勧めのエリアを散策等を予定し久万高原町にある「面河山岳博物館」へ活動会員3人で出かけた。

9時30分、中央公民館を出発。R33で久万高原町～面河溪方面へ、擦れ違う車もほとんど無い道程を進むこと1時間15分目的地に到着。私がおこを訪れたのは20年以上経つだろうか？初来館状態で入館。私たちが特別展第一号の来館者となった。Kさんは頻りに訪れているようで学芸員の方と親しそうに挨拶をしていた。

早速2階の展示室へ。パンフレットによると、

骨は「死」を連想してしまう不吉な存在。しかし、骨は体を支え、内臓や脳を守り、血を作り出す私たちに欠かすことの出来ないもの。また、骨にはその動物がどんな暮らしをしているのか、どんな進化の道筋をたどってきたのかを知ることができる多くの情報「ものがたり」が隠れています。そして、何よりも骨は美しい！普段は見えない骨の世界へ、といざなう。展示内容としては、

【ホネってなんだろう？】★脊椎動物の起源、骨の役割★人間の骨、骨の名前、私たちの手のひらには何個の骨があるか？★骨折のレントゲン写真

【脊椎動物のホネ】★さまざまな哺乳類の頭骨(ホッキョクグマ、アシカ、ハイエナ、キリン、シマウマ、カンガルー、ジャガー、ライオンなど)★1mを超すアジアゾウの大腿骨、体長4mのミンククジラの全身骨格★絶滅したニホンオオカミの頭骨レプリカ★四国の代表的な哺乳類の全身骨格(シコクトガリネズミ、イノシシ、タヌキ、キツネ、ニホンザル、モモンガなど)★四国のへび8種の全身骨格標本★魚類の美しい透明骨格標本、エイ、アンコウ、マンボウ、アロワナ、ピラニアなどの骨格標本★骨から見る脊椎動物の進化

【無脊椎動物のホネ】★外骨格をもつ昆虫や甲殻類(カニ、エビなど)★刺胞動物(サンゴ) 棘皮動物(ウニ、ヒトデ) 軟体動物(貝類)

体験展示として【ホネを触ってみよう！】タヌキやイノシシの頭骨など骨格標本に自由に触れられます【ホネしおり作り】入場チケットをハサミで切って動物の全身骨格写真付きのしおりを作る【昆虫とホネ塗り絵】博物館オリジナルのかわいい昆虫とホネの塗り絵です【カブトムシ・クワガタムシ触れ合いコーナー】など、動物好き、理科好きの子供達が飽きる事なく楽しい時間が過ごせる工夫があり、夏休みにはたくさんの子供達で賑わいますように。

展示内容に関するクイズが会場内にちりばめられ子供のみならず大人も楽しめる展示になっている。私は中でもレースの様なエイの骨格標本に魅せられた。この細かでたくさんの骨を骨格どおりに並べ標本に形作る工程は、展示室にあるすべての標本も同様に大変な作業なのだろう。特別展開連イベントとして、

- ①特別講演会「ホネを集める、ホネを残す」7月26日講師：谷地森秀二氏、渡辺紗綾氏による、動物の死体集めから標本作製までホネ収集人がホネの魅力語る
- ②体験講座「ホネをならべてくらべてみよう」8月10日海田明裕氏による、動物の骨を並べ比べ、グループによって異なる骨格の仕組みを学ぶ。
- ③展示解説「ホネのはなし」8月3日・8月24日博物館学芸員が特別展の見どころを分かりやすく紹介。これらのイベント全て参加すれば、かなりのホネ博士になれるだろう。

ホネの展示室へ学芸員の方が、わざわざ私達のために「オオツノカメムシ」を採集し持ってきてくれた。初オオツノカメムシです。翡翠のような緑色、肩の部分に赤く鋭い角、体長15mm前後あり、わたしたちが洗濯物にくっつき迷惑するカメムシとは大違い。が、臭いは同じ。資料によると、分布（本州、四国、九州、南西諸島）体長（16～18mmメスの方が大きい）出現期（4～10月今年は出現期が遅れているようだ）エサ（ケンボナシの汁）低山地～山地に生息個体数は少ない「ケンボナシ」山地に自生する落葉高木、非常に高く成長するだけでなく、沢沿いや谷筋など人が入り込みにくい所に生えている。そのため、ケンボナシの実に集まり、それ以外の植物ではほとんど見ることがないため、オオツノカメムシは見つけにくい。ところが、この博物館の隣にはケンボナシの仲間であるケケンボナシがあり、しかも、ちょうど葉や実がつく樹冠部はテラスから手の届く所なので、オオツノカメムシの観察にはもってこいの場所である。残念ながらテラスからケケンボナシを見ることはできなかったが残念だった。館内で1時間程過ごしたのだが私達だけの贅沢な空間となった。

博物館を後に5分程車で移動。面河溪のシンボリックな亀腹岩の裏側を時間的なこともあり片道20分範囲を散策することにした。博物館で見た「もみじ石」（放射状の電気石）を探しながらキャンプ場をうろうろ。そうは簡単に見つかるものではない。「錦溪橋」まで歩き「見月岩」「兜岩」「鎧岩」を眺め、鳥の声に耳を澄ませる。Kさんが以前ここを訪れた際「オオルリ」の鳴き声に感激したとのこと。残念ながら耳にすることはできなかった。それにしても、土曜というのに人出の少ないこと。午前中ではあったが、中高年の3人グループ、大学生らしき

6人グループ、カップル2組と擦れ違っただけだった。20年以上前だが涼を求めて家族連れがたくさん訪れ、川で泳いだり釣りをしたり自然を満喫する光景を目にしたが、全く人気がない。夏休みになったばかりで梅雨明けもしていない、夏本番になれば賑やかになるのかもしれないがちょっと寂しい気がした。

散策後、面河を後にし久万高原町の道の駅「さんさん」で野菜たっぷりのランチバイキングを頂き帰路についた。 (A.10)



さまざまな動物の骨格標本を展示している「ホネものがたり」2014.7.23

動物の骨興味持つ

久万高原 哺乳類など200点展示

哺乳類や鳥類などさまざまな動物の骨格標本を展示する「ホネものがたり」が19日、久万高原町若山の面河山岳博物館で始まった。8月31日まで。

久万高原町と愛媛新聞社が開催する特別展。シコトガリネズミやモモンガなど4国に生息する動物など140種約200点の骨格標本を公開。インシヤータスキなどの骨に実際に触れるコーナーもある。

会場では標本に解説

跡が見て取れることを紹介。絶滅したニホンオオカミの頭骨のレプリカなど珍しい展示もあり、子どもたちがメモを取りながら興味深そうに見入っていた。

松山市道後小2年の飯本真矢君(7)は「へびの骨が面白かった。ウツボはかっこよかった」と楽しんでいた。博物館の矢野真志学

委員(39)は「普段骨を目にすることは少ないかもしれないが、自分の体や食卓など身近な場所にある。知識を深めることで、いろんな動物の骨格に興味を持つてほしい」と来場を呼び掛けている。(柳生秀人)

<関連記事>

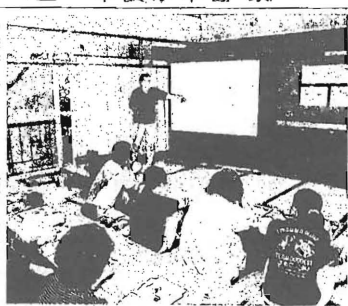
愛媛新聞より

骨格標本作りの研究活動を紹介

久万高原で専門家 河山岳博物館で開催中の特別展「ホネものがたり」に関連する講演

「ホネを集める、ホネを残す」がこのほかに、近くの国民宿舎「面河」であり、町民ら30人が専門家の研究活動について学んだ。

高知県高知市の認定NPO法人四国自然史科学センターの谷



生き物の骨格標本を作る研究活動について専門家が話した講演会(面河山岳博物館提供)

重要と述べた。NPO法人日本ワミガメ協議会室戸研究基地の研究員として活動している渡辺紗綾さんは、ミンククジラやスズイルカ、ウミガメの骨格標本作りの経験を説明したほか、魚の標本は実際に身を食べてから作ることを話した。

地森秀二センター長は、一般向けに哺乳類の骨格標本の作り方を室を継続的に、ボランティアのスタッフ

2014.7.28 地軸

生物種が生息した証しを記録するのが標本。どんな種類が、どういった生活を、いかなる場所で送っていたのか。標本は、これらの生態学的地位まで再現してくれる

▲生き物が好きで、幼少期からさまざまな標本をつくってきた。昆虫標本にはじまり、薬液に浸して細胞の組織を残す液

浸標本、顕微鏡用のプレパラート標本。脊椎動物の製法は、体形や筋肉の付き方を熟知した上で、少しテクニクが必要

▲最難関は骨を組む骨格標本だ。何しろ「部品」は多いし部位の特定も難しい。脚骨や脊椎骨の順番、指の間の骨の配置

などは、目の前にしてため息が出る。しかし、最も魅力的な標本でもある。種の特徴や進化史を凝縮したのが、骨だから

▲そんな生き物の「骨」が主人公の特別展が、面河山岳博物館で開かれている。タイトルは「ホネものがたり」。

骨までしみるホネの世界によつて「ホネものがたり」の妖しい誘い文句に引かれて会場だ。そこは、多様な骨が共演する魅惑の空間だ

▲魚類や両生・爬虫類、鳥類から哺乳類まで、あらゆる脊椎動物の骨が、めくるめく時空を演出。頭骨や脚骨、大腿骨の構造で分類群の特徴を知ることができ

▲科学的な知見が好奇心をくすぐる。かたわりに返ると、これらの来し方行く末にまで想像を巡らせている自分を見つけた。骨は、それほかに人を幻惑もす

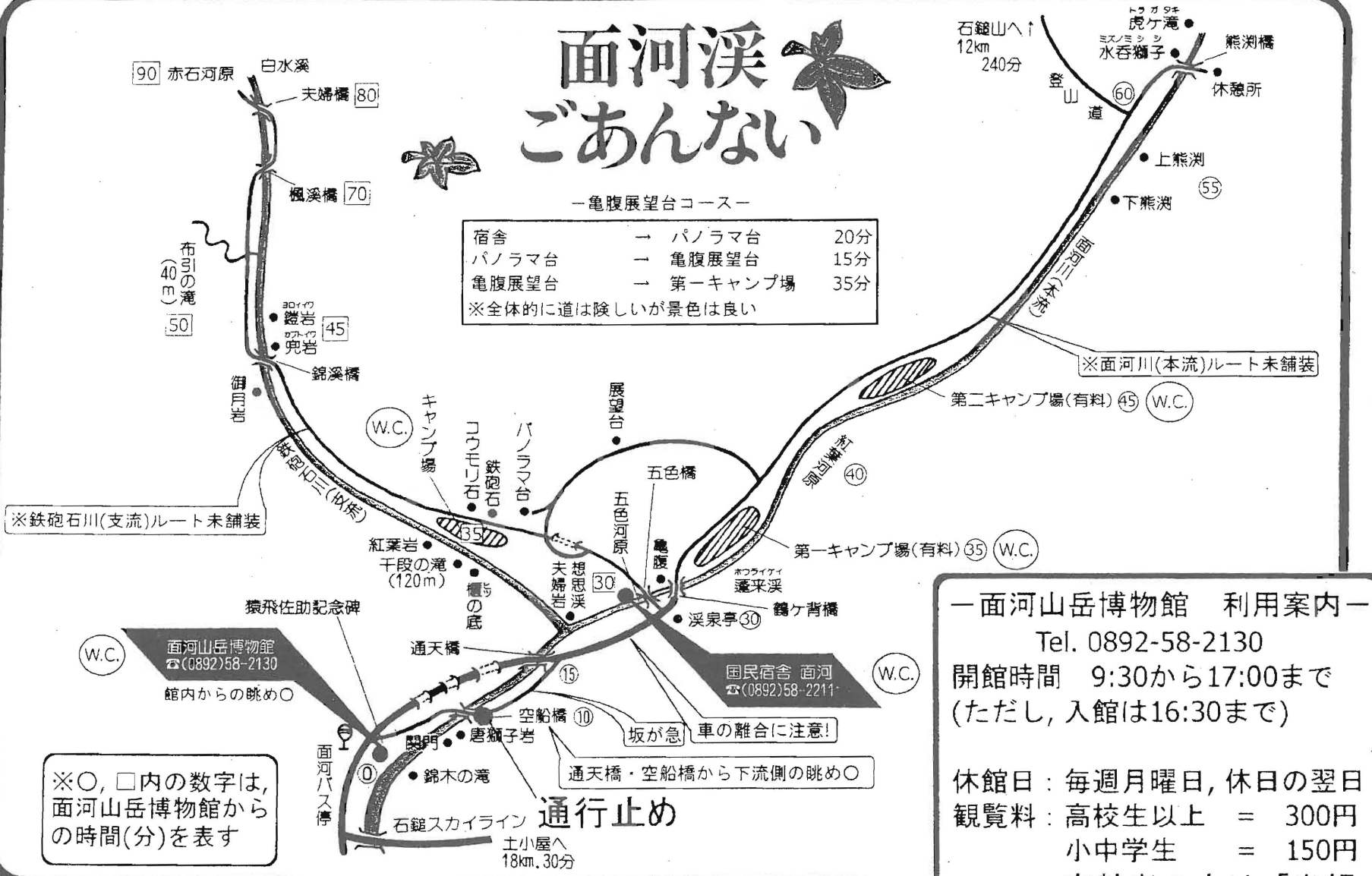
る。単なる標本展ではない、魂さえ宿る幽玄の世界へ、ぜひ出かけよう。

面河溪 ごあんない

— 亀腹展望台コース —

宿舎	→ パノラマ台	20分
パノラマ台	→ 亀腹展望台	15分
亀腹展望台	→ 第一キャンプ場	35分

※全体的に道は険しいが景色は良い



※○, □内の数字は、
面河山岳博物館から
の時間(分)を表す

一面河山岳博物館 利用案内—
Tel. 0892-58-2130
開館時間 9:30から17:00まで
(ただし、入館は16:30まで)

休館日：毎週月曜日、休日の翌日
観覧料：高校生以上 = 300円
小中学生 = 150円
高齢者の方は「半額」

通行止め

土小屋へ
18km, 30分

坂が急 車の離合に注意!

通天橋・空船橋から下流側の眺め○

面河山岳博物館
☎(0892)58-2130
館内からの眺め○

国民宿舎 面河
☎(0892)58-2211

※面河川(本流)ルート未舗装

※鉄砲石川(支流)ルート未舗装

ジャコウアゲハ 2014.6~9



井戸端だより 86号(2014.6.17発行)でジャコウアゲハの様子をお知らせしたように、悪条件が重なって今年はその姿が見えないのではないかと考えていた。

ところが、食草のウマノスズクサが伸び出した頃、突然1頭の雌が飛んできて葉っぱの裏側に卵を産み付けた。2日後には2頭になり卵が増え始めた。

それにしてもどこに潜んでいたのか。団地の入口の花畑でもウマノスズクサを増やして4年経っていた。今年5月以降手入れはせず自然に任せていたのがよかったのか、そこでは食草が増えジャコウアゲハが育っていた。家の周り4ヶ所に植えていた食草に、毎日のように飛んできて卵を産み付けるようになると今度は食草が足りない。春の初めにジャコウアゲハに興味のある会員にとりあえずウマノスズクサを植えてもらっていた。そこへ増え過ぎた卵・幼虫・蛹を持って行った。育っていく様子を詳しくメールで知らせてくれる。

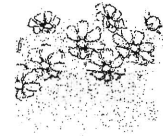
我が家とは言えば、卵から幼虫になり食草を食べ出すと旺盛な食欲に食べ物が足りない。柔らかい葉っぱの端からかじり出しそれがなくなると茎をかじり突先で2個が奪い合っているのをよく見かける。茎の途中をかじるのでその上の部分は枯れてしまう。それが蜘蛛の巣に引っ掛かり風に揺れているのを見てもつたいないと思いつつ思わず苦笑する。

お腹一杯食草を食べ4cm近くまで成長した終齢幼虫は蛹になる場所を探す。葉の裏側や・塀・家の壁面にくっつき、細い枝や針金などにもしがみついているのも見かける。幼虫から蛹に脱皮する時は、首にかけた1本の細い糸を両脇で留め、もう1か所はしっぽの部分でしっかりと固定し、体全身を使ってゴヨゴヨさせながら黒い表皮を脱ぎ捨てて黄色い個体になりその姿で固まっていき、やがて羽化するのを待つ。蝶になった時の部分の形がわかる。羽化するときは蟬のように背中が割れ最初に羽が出てしばらくダランとしたままで羽を乾かし、そして飛んでいく。

我が家の庭で生まれ育った蝶が飛ぶのをみると何とも愛おしい。短い一生を懸命に生きている小さな生き物、観察していると心がなごみたくさんのことを教えてくれる。しかし、まだ心配ごとがある。小さな幼虫が芝生やコンクリートの上を食べ物求めて這いまわっている。ウマノスズクサが少し残っているところへ連れて行ってやったりもするが足りない。成虫になっても卵を産み付けるものがない。まだ根っこはある。少しでも芽吹いてくれることを祈っている。人間も同じ、偏食する子供を育てる親は苦勞するものらしい。

(S. K)

満州（鞍山）の終戦



今年も8月15日の終戦記念日がやってきました。

あの頃の体験を忘れないうちにまとめて文集にしようと話し合っていた弟が、3年前に黄泉の国へ行ってしまいました。弟への鎮魂歌として、又、第二次世界大戦が終わって69年が過ぎ、戦争を知っている人が少なくなった現在、戦争体験者として語らねばならないという思いでペンを取りました。終戦当時小学六年生だったので、その時の目線で思い出すままに書きました。ご判読下さい。

満州の8月15日は暑い暑い日でした。夏休み中なのに急に登校の通達があり、全生徒が講堂に整列しました。「只今より、大切なラジオ放送があります」と言われ、皆シーンとして直立不動で待ちました。壇上のラジオは調子が悪く、ザーザー、ガァガァ、ラジオを叩く先生、スイッチを入れたり切ったりしていましたが、その内ラジオを囲み、耳を近づけ、すすり泣きが聞こえました。生徒は何もわからないまま、でも何か変化を感じ動揺して騒ぎました。ラジオのスイッチを切り教頭先生が壇上より下りて「静かに！！只今天皇陛下よりお言葉がありました。終戦です。戦争に負けました」一瞬水を打ったように静まり、お互いに目を見合わせました。しばらくして事の成行きを子供ながらに理解し、唯々全員声をあげて泣きました。講堂いっぱい泣き声の渦となり、どの位時間が過ぎたのか、先生がふるえる声で「今日は下校して下さい。そして家の人達とよく話し合ってください」と言われ、分団で下校し帰りました。家では食堂で小父さん達が泣いていました。大の男が泣くなんて初めて見る情景でした。皆さんが帰られた後、父が私と弟に「戦争は終わったんだよ。沢山の兵隊さんが国や皆を守るために戦ってくれた事を忘れるな」とだけ言って目を伏せた父の表情を今でも鮮明に覚えています。その頃の家族構成は、私（千鶴）6年生、弟3年生、弟1年生、妹3才、母臨月（8月30日弟出産）、と父でした。

終戦の2年程前より北満へ北満へと夜、行軍で兵隊さんが移動しはじめました。私の住む鞍山（昭和製鉄所あり）の民家で休憩を取らすよう指令がきました。最初はお茶だけ出し、次は座敷に上げ足を伸ばしてもらおう。その次は夕食を出す。最後には夕食と酒少々良しと、段々と厳しさがやわらいできました。中には呑めない兵隊さんに無理に口に入れて酔わせる無頼漢みたいな兵隊も居ました。帰りのラップが鳴り、席を立とうにも立てない若い兵隊さん（大学生）を見て、急いで階下に行き「早く酔い止め薬を」と母の手から、もぎ取るようにして兵隊さんに飲ませました。うっすらと目を開けた兵隊さんは私を見て「ありがとう」と云ってくれました。他の兵隊さんはゲートルを巻いてサッサと出て行きました。私は父を呼び兵隊さんを背負ってもらい隊列まで送り届けました。「誰が呑めな

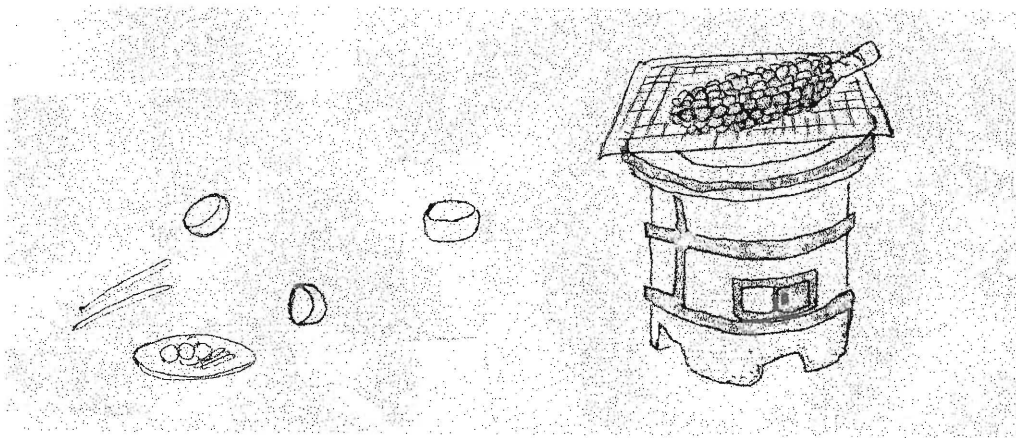
い人にこんなに吞ませたの」と大声で泣きさげびました。後で聞いた話では、あの時すでに日本が負けることを軍部では判っていたそうです。あの時の兵隊さん達は無事に祖国の土を踏む事ができたのだろうか。

8月15日、何度迎えても、少女の脳裏に深く刻まれた戦争は消える事はありません。何の罪もない、憎しみもない人達が殺し合う戦争だけはしてはいけないと年を重ねる毎に強く思います。今生かされている事に感謝の念で一杯です。犠牲となられた御霊に手を合わせ「御霊よ、安らかにあれ」と祈るばかりです。

(Chi・T)

平成26年8月15日、69回目の終戦の日を迎えました。戦没者追悼式が開かれるなど、全国各地で不戦の誓いを新たにする人々の姿が見られました。しかし今、日本は戦争のできる国に向かっています。東京大空襲、沖縄の地上戦、広島・長崎の原爆そして異国で終戦を迎えた人々の苦しみ、戦争のむごさを決して忘れてはいけないのです。今一度、平和憲法の真意を考え、過去の歴史を正しく伝えなければ、再び同じあやまちを犯すことになるのではと心配になってきます。これらの事を知っておられる80代90代の人達の体験談を皆が知っておかなければならないと思い、今回は『満州(鞍山)の終戦』を執筆して頂きました。

(S.M)





父の姿

朝ドラ「花子とアン」の物語が、自分の家族の歴史を見ている様に心に響く。

私の父は、衣料品の行商で、大勢の子供たちを養い、どの子にも一人で自立出来る様に勉強させた。それには、自分が勉強したかったのに学校に行かせてもらえず、大阪に丁稚奉公で商売人になったが、結婚して子供が出来たら自分の夢を子供に託したようだ。

母は、次から次に生まれる子供の世話と家事に追われ、勉強は父に教えてもらい羨も父がしていたと思う。戦時中だったので、姉五歳、私三歳位の時に、朝早く起こして自分が先頭で護国神社や松山城迄、一二、一二と走って体力を付けると共に兵隊さんの武運長久を祈った。

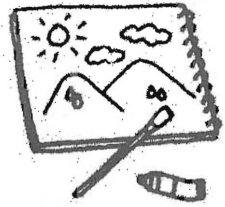
学校へ通う様になると参観日も父親が来てくれ、先生への贈り物をしたりして、先生も可愛がってくれた思い出もある。姉が女学校を受ける時、鉄棒が出来ないと、夕方学校へ一緒に行き、私が手本を示し何回も練習させたが、前回りも逆上がりも出来ず、父が悲しんだ事を覚えている。姉の話では、試験に前回りだけがかろうじて成功し、受かったそうだ。

私は、大学迄何とか終え、教員になったが、父親としては期待はずれだったらしく、「お前もそこまでじゃったか」と言われ申し訳なく思った。赴任先で知り合った亡き夫と結婚する事になった時は、「女は女学校にやってもつまらん」と肩を落とした。結婚式の日には、「わしは行かん」と母を困らせた話は、母の笑い話になっていた。

妹は、ピアノが好きで、家にピアノがないので、父は妹を小学校へ朝早く自転車に乗せて行き、音楽室のピアノで練習させてもらった。父は教室の横で耳をそばだて聞き、妹の将来を夢見ていた。

そんな父も六十歳で肺癌になり半年の療養で亡くなった。姉は日赤で看護師になっていたし、私は教員になっていたので妹たちの学費を助け、母は人様の子守から風呂の番人までして、お金を稼ぎ、父が亡き後も子供の教育には、体を惜しまず働いてくれた。

五人の姉妹は、六十五歳から八十二歳まで皆元気で、それぞれの性格に



合った教室に通い自立している。

姉は、スイミングに俳句にと趣味が幅広く健康で旅行も楽しんでいる。私は腰痛と血圧の病で運動はできず、文章を書くこと、教会へ通い心を満たされ友達と外食を楽しんでいる。直ぐ下の妹は、コーラスに英会話教室へと自分を精一杯外に出している。次の妹は、ピアノで生計を立てていたが、今はお弟子さんも少なくなりボランティアに励んでいる。下の妹は、絵画が好きだったので美大を出た後、技術を生かす仕事には就けなかったが、今では絵画教室に通い自分を生かしている。

五人の姉妹が、年二回誕生会を持ち、思い出話をする度に、父親への感謝と貧乏だったから助け合いの絆が強いのだと自負している。

父親は、天国でよう頑張ったと言ってくれていることだろう。

(SA. K)

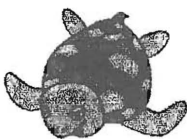
パタパタと小亀が目指し行く先は太平洋の遠き海原

銀杏散り鉄路の上を音も無く府電が滑り驚きの声

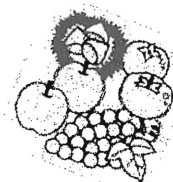
擬態の眼驚くほどの大きさとストーンと落ちてスタコラ逃げる

蜘蛛の巣に絡め獲られて黒揚羽おおきく揺すり羽ばたいて去る

(A・N)



高齢者施設見学



久万高原町義に住む義母が、「ここは冬が寒いから嫌じゃなあ」と、夫に話したことがきっかけになり、東温市内の高齢者施設見学を勧めることにした。92歳と88歳で、介護認定を受けずに二人で生活をしている。私たちが住む東温市内へ来るときは、交通の便が悪いので、92歳の義父が車を運転する。迎えに行くからと言っても、私に遠慮するのか、断られる。できるだけ自立をという気持ちからか、夫にも頼らない。夫は、月に一回か二回、家を訪ねて短い時間を過ごすだけである。

施設見学だけということで、二か所の施設を訪ねることにした。施設は、最近できたものと建築後8年程度の二つを選んだ。木造と鉄筋と構造が違う建物は、やはり、鉄筋のほうが、安心感があり、床暖房、廊下の広さ等木造よりもいいと思っていたので先に見学をすることにした。ここでは、二人の年金を見せて、必要経費などの説明を聞き、共有スペースや個人スペースも見せていただくことができた。二人の年金を見せると、二人分になるということで、一人の経費は、考えていたよりも安いということがわかった。義父が生年月日を記入すると、この施設の男性では最高年齢になるらしい。少し、耳が遠いだけで、日々の暮らしに困ることはない義父は、毎日散歩に出ている。雨が降っても、朝食前の散歩は欠かしたことがないと話した。施設の周りには散歩ができる場所があると聞き、施設の生活の理解が少しはできたと思う。最後になって、職員の方が「何かご質問は？」と言われたときに、義父が「ここは、駐車場があるの？」と聞いた。それには、施設の方も、私たちも驚き、夫が「もう、車はやめんといかんよ」と言った。義父は92歳。夫の方が正しいと私も思ったが、口にはできなかった。二人で支えあい暮らす中で、二人にとっての車は必需品なのだろう。

二件目の新しい木造の施設の方は、夫も疲れたのか、30分程度の見学で済ませた。ちょうどお昼時で、カレーが配られていたようだが、最初の施設のメニュー表を見ていた夫には、副菜がないもないメニューが気に入らなかったようだった。

翌日、義母から昨日のお礼と、もうしばらくは、ここで暮らすという電話があった。義母は、自分の母親が、寝たきりになった後、施設に入り、認知が進んでしまった話を夫にしたようだ。何もわからなくなることを一番避けたいと話したそうだ。施設に入り、何もなくなると、認知が進んでしまうかもという恐怖があるということだった。今回は話をすすめないということらしい。

お節料理を届けに行った時、料理上手だった義母が、年越しそばはカップラーメンで済ませているという話をした。知らなかった話だったので驚いた。二人の生活は、年々変化している。

(M・T)



雑がみ

雑がみ、この言葉にやっと出会えたのは、京都に来てからである。新聞紙、雑誌類に段ボール、これらはヒモかけをして資源ごみに出す。その他の紙類として、包装紙、紙箱に始まり小さなもので衣類に付いている値札タグ等、ヒモのかけようのない紙クズ、これらが雑がみである。この雑がみは回収しない自治体もある。生ゴミの中に突っ込むのである。そうすると嵩は増大し回収時の量はふえ時間はかかる。人件費もふくらむ。焼却場では、湿った紙類を燃やすことになり燃料はかさむ。税金を無駄に燃やしているのである。

生ゴミの少量化は、いずれの所でも言われている。使い切る・食べ切る・水を切る、この3つの切るは徹底されていても、プラスチック以外のもの、紙箱、紙袋、紙コップ等、一家庭では少しかもしれないが、全町内、全区、全市となると膨大なものになる。ひいては地球上の森林を燃しているのである。

今私の住んでいる京都中京区では、雑がみを各戸、各事業所で分別することがポイントであると印刷物で呼びかけている。私は、以前住んでいた大阪での長い生活から、どうしても生ゴミの中に、紙類を突っ込めないでいた。東温市では、紙の収集時に色々やってみたが、回収してもらえず、市議さんに尋ねてみたこともあった。それは望めぬことであった。そうした何年間があつて、京都で、きちんと明記され「もう何年もずっとそうしているよ」と当たり前のこととして話してくれた人もいる。

今朝は、近くの北野天満宮のお旅所の前にうず高く古紙が積まれていた。当地子ども会への寄附に変えられる。時に、昔ながらの古紙回収業者の車が廻ってくる。現金に変えてくれることもあるらしい。

東温市と一つ違っていることは、ゴミ袋に記名はしない。この件は東温市議会で激しく議論されたと聞く。かつて二度、近隣のよくお世話事をしておられるご婦人が、「又、名前がない。ゴミの中を調べたらわかる・・・」と。こんな会話が平然と交わされる処にまできているのである。

もう一つの京都市との違いは、ビン缶類は分けないで回収される。所定

の集積場で、人手でより分けられる。労働の場が提供されているのである。ある区によっては、高齢者の集まりの場ともなっている。各自治体の状況により、様々の知恵と経験が活かされているのであろう。

これは所定のゴミ回収ではないが、常時設置されている資源回収の分別項目を記します。京都市中央図書館前の状況です。

廃蛍光灯専用ケース、蛍光管、ビールびん、リユースびん、一升びん、乾電池、紙パック、てんぷら油、横脇にびん入れ用のキャリーが幾つか。又、生協の店舗入口には、牛乳パック、卵のケース、材質ごとの缶、容器がうず高く積まれていて、京都の人々の日常が手に取るように写されている。

「ゴミリサイクル」が叫ばれ実施されるようになり、もう久しいことであるが、京都府下においては、行政の下、既に明治二年には、正しく「ゴミのリサイクル」という言葉で資源再生が標榜されていた。

京都では、他にも様々の分野で画期的改革が実施されている。もうひとつの明治維新、「京都維新」が、古き都で断行されたのである。先に「井戸端だより」に書かせて頂いた小学校創設という教育分野だけでなく、目を見はる一大マニフェストが次々と出され*日本で初めて*と自負する事跡が、枚挙に遑がないのである。

(M・D)



京都市中央区の広報より

雑がみは地域での集団回収や古紙回収業者などの回収にお出しくたさい。ご協力をお願いします!

雑がみとは新聞紙、雑誌・書籍、段ボール、紙パック以外の紙製品のこと。燃やすごみを減らすための一番の近道が、雑がみと生ごみの減量・リサイクルです。京都市では、雑がみもリサイクルできる資源として、資源回収を推進しています。

ごみを減らすために、京都市は紙ごみの減量に力を入れています!



紙箱



台紙



印刷物



ビール・ジュースの6本パックなどの紙ケース



包装紙



紙袋類



封筒・はがき類



紙芯



行ってみたマレーシア



8月7日～12日までマレーシアに行ってきた。今回は、友人の教え子の結婚式に参加するというのが主目的だった。

そもそも自分の教え子でもない学生の結婚式になぜ出ることになったのか。話は5月にさかのぼる。24日に松山で日本語教育の研修会があった。それに参加した高知大学の日本語の先生で旧知の二人（Iさん、Oさん）がうちに泊まった。その夜の事である。色々話しているうちに、Iさんから8月に教え子の結婚式に出るためにマレーシアへ行くが、一緒に行かないかと誘われた。その時期はまだ仕事の方が忙しく、無理かなと思ったが、それ以前に全く見ず知らずの人の結婚式に出ていいものかそれも問題だった。話によると、マレーシアの結婚式は誰でもウエルカムだという。Oさんもその学生をほとんど知らないが、一緒に行くという。悩んだ。結婚式に出られるチャンスはそうそうあるものではない。仕事は確かにあるが、前倒しして頑張れば大丈夫かもしれない。心が動いた。まず、彼女たちが乗るといふ飛行機と同じ便に運よく席が残っていれば、予約する。それを目標に目先の仕事を片付けよう。決まった。

何とエアアジア（マレーシアの格安航空）の彼女たちが予約したというビジネスクラスの空席がまだあったのだ。ということで、7日午前11時関空発、それに間にあうよう6日夜10時半東予港発のオレンジフェリーの予約を取り、帰り12日の関空—松山の格安航空ピーチを予約した。これで行き帰りの予定は決まった。また、結婚式では二人と共に着物を着ることになった。夏の着物は着たこともなく、洋服で出るつもりだったが、ひよんなことから母が昔ハワイであったレセプションに着たという緋の着物を着ることになり、その着物に合った帯あげ、帯締めは高知の二人がプレゼントしてくれたので、とんとん拍子に準備がすべて整ったのである。

仕事を片付け、無事7日朝関空で高知からの仲間と合流（I、Oさん＋Iさんの友人KI、KZさん）、一行5人マレーシア行きの飛行機に乗り込んだ時はほっとした。ビジネスクラスの180度体が伸ばせるゆったりしたシ

ートはありがたかった。クアラルンプールまでの6時間余りの間に睡眠不足を解消することができた。

午後4時半ごろ（時差-1時間）クアラルンプール着。空港には結婚するカイルさんの大学の先生でやはり高知大でIさんの教え子だったアリフィンさんの、指導院生ナジラさんがプラカードを持って我々を待っていてくれた。空港外にはアリフィンさん一家も迎えに来てくれていた。早速大学のワゴン車に乗り込みホテルへ。

ホテルの部屋は、中にドアはあるが二部屋続きで便利だった。KIさんとKZさんが一部屋、私達3人がもう一部屋で、ツインベッドにエクストラベッドを入れてもらった。3人がベッドをローテーションすることにし、まるで合宿の様な感じだった。

1時間後、また大学のワゴン車に乗って、アリフィンさんが寮長をしているプトラ大学の13カレッジへ。寮長の官舎はとても広かった。奥さんのアナさんもIさんの地域の日本語教室の教え子で、アナさんのご厚意で、お部屋をすべて見せてもらった。イスラム圏の女性が髪を覆うツドンやスカーフは何枚あるのだろう。色、柄、素材、飾りの違う数多くのものが一部屋占領して専用の円形ハンガーに掛けられていた。イスラムの女性は、これを変えたりブローチやピンで変化をつけたりしておしゃれを楽しんでいるのだろう。他には上下に動く電動ハンモック、一人用サウナなどが目を引いた。

応接間に通されて、アナさん手作りの何種類ものお菓子を勧められた。どれもおいしかった。そこへ女子寮生たちが集まってきて、挨拶をしてくれた。名前はとても覚えられない。皆着飾って、全員違う色のツドンをかぶっていたので、聞いてみた。やはり相談して違う色の物をかぶって来たのだという。驚いた。丁度ラマダン明けのお祭りの時期で、街中着飾っている人が多いのだそうだ。料理もこの時期しか食べられないものもあるとのこと。外の広場にはテントが張られ、ケータリングのお祭り料理が並べられていた。寮の関係者、男女学生が大勢集まってきた。日本からの留学生も一人いた。

私達の歓迎パーティーが始まった。アリフィンさんの挨拶、プトラ大学と高知大学の今までとこれからの交流の話、それに応えてIさん、Oさんのお礼の挨拶が続いた。今年11月にはこのうちの何人かが高知大を訪れるという。完全にプトラ大学の賓客扱いで、愛媛から来た私は少し居心地が悪かったが、アリフィンさんと個人的に話した時、アリフィンさんが、自分は高知大で勉強したが、博士号は連合大学院の主幹校である愛媛大学の名前でもらったと言ってくれたので、少し安心した。すべて英語での対応なので、思うようには話せないところが歯がゆい。学生たちのダンスが始まった、ザッピンという伝統的な踊りで、Iさん、KIさんも学生たちに教えてもらって踊っていた。もちろんお酒はなかったが、楽しい雰囲気の中初日の行事は終わった。ホテルに着いた時は、全員ビールが飲みたいということで、ホテルで売っていた高いビールを買い、部屋で祝杯をあげた。このビールのおいしかったこと。いい眠りにつけた。

次の日も大学のワゴン車が迎えに来て、クアラルンプール観光に連れて行ってくれた。

国立モスクは金曜日で入ることができなかった。すぐ隣にあるイスラム美術館に入った。イスラムの文化、衣装、コーランの各種装丁本、各国のモスク模型、天井の様々な装飾、色々あった。白い素敵な建物で、立派なものだった。次にセントラルマーケットへショッピングに。お買い物大好き集団だったので、ここでの時間はあっという間に過ぎた。

クアラルンプールの象徴的建物ペトロナス・ツインタワー(452m)を噴水のある下から眺めたり中に入ったりした。噴水の脇のバーで皆ビールを一杯。それからKLタワー(421m)へ。6時過ぎアリフィンさんと待ち合わせ、ここの展望レストラン(276m)で晩ごはん。ここから見えるクアラルンプール、ツインタワーは最高だった。1時間半で360度のパノラマが楽しめる。暗くなるにつれて、夜景の素晴らしさも増した。料理はインターナショナルで、刺身もあった。おいしかった。生演奏もあり、KIさんのリクエスト音楽も流れた。ここでの食事代を私達が払うということにしたが、結局アリフィンさんが夜景をバックにした食事風景とタワー下で撮った

全員の商業写真を購入してプレゼントしてくれたので、大してお礼にもならなかった。

3日目土曜日は、当初アリフィンさんは学生の体験学習の田植や魚釣りを私たちも一緒にして、夜蛍を見てそこに泊まるという予定を考えていたらしいが、私達がある程度の年齢であること、田植も魚釣りも珍しくないこと、ショッピングが好きなこと、次の日結婚式に着物を着るには夜遅くてもホテルに戻っておいたほうが良いことから、よく気の付くアニさんが助言をしてくれたようで、学生と一緒に体験学習はキャンセル、夕方学生のホームステイ先の施設で、一緒に食事をして、夜蛍を見て、遅くなくてもホテルに送ってもらうことになり、助かった。

まず、ナジラさんが地元の人がよく行く布などの店が集まっているところ（マズジット・インディア？）に連れていってくれた。皆再び買い物モードに。十分に買い物した後、そごうデパートへ。お昼はフードコートでナシゴレン（7リングット 1RM=約32円なので200円ちょっと）やチキンなどを食べた。丁度バーゲン時期でもあったので、メンバーは大興奮。日本の「そごう」なので、トイレはきれいだろうと思ったが、その予想は裏切られた。お金を取る上に、あまりきれいとは言えないものだった。

それからバトゥ洞窟へ。ここはヒンズー教の聖地で、金色の像の横にある272段の階段を上った岩山に巨大な洞窟が広がっていた。ヒンズー教の信者は皆裸足になっていた。野生のサルがいて、携帯を取られて大騒ぎしているグループもあった。下には池があって、鯉が泳いでいた。ここで、大学のワゴン車が来るのを待っていた。

イスラム教の国では、一日5回のお祈りは絶対である。遠出したりしても、必ず途中お祈りの時間が必要で、それができる場所で私達は待たなければならなかった。女性は必ず白い衣装に着替えて（外出時持参している）、男女別の場所でお祈りするということがわかった。すべての予定はお祈りの時間、場所を組み込んだものでなければならないということがわかった。宗教に無頓着な人間には驚きでもあり、理解がなかなかできない部分でもあったが、尊重はしたいと思った。ワゴン車の運転手ヨップさんは、始め緊張してい

たのかあまり話さなかったが、毎日接していると心が通じ合い、時々冗談を言ったり、嬉しそうに声を出して笑ったりするようになった。前歯の抜けた面白い人だった。

夕方郊外の学生たちが待つ施設に着いた。初日の歓迎会でアリフィンさんからプレゼントされた 13 カレッジのユニフォームを車の中で5人全員着て登場した。すでに、学生や大学の職員が晩ごはんの準備をし始めていて、ドリアンに似たジャックフルーツの中をスプーンでくりぬいたものとバナナを天ぷらにしたものを前菜に、オタオタ（魚のすり身に香辛料などを混ぜてバナナの葉でつつんで蒸し焼きしたもの）、学生の釣った魚を焼いたもの、チキン料理など色々運んでくれる。マネージャーのmastさん、奥さん、奥さんのご両親も一緒だった。お宅がここから近いということだった。KIさんは午前中の買い物で、ツドンを買ってかぶっていたので、大うけだった。飲み物は主に薄いプラムジュースだった。マンゴスティン、ランサイなど果物もおいしかった。サモアサダップ（全部おいしいという意味のマレー語）だった。

それからホテル観賞に出かけたが、水量が多すぎてボートが出せないということで残念だった。ボート乗り場の前で学生、職員、私達5人総勢40名ほどで撮った記念写真は、誰のカメラに収まっているのだろうか。残念ながら私のカメラにはない。そこで皆のお見送りを受けて、深夜私たちだけホテルに送ってもらった。本当に助かった。

10日結婚式当日、比較的朝ゆっくりし、着物を着る3人は10時ごろから着物を着始めた。夏の着物は薄手なので、気を使う。帯だけ手伝ってもらった。主にOさんにお任せした。日本なら色々言われるかもしれないが、ここは外国、完璧じゃなくても着られていたらいいという安心感もある。3人着つけが終わったところに、ワゴン車のお迎えがあった。ヨップさんが着物姿の私達を見て大喜びしてくれた。12時過ぎに結婚式会場へ。新郎新婦はまだ登場しない。テントが新郎の自宅の前のサーカー場の様な広場に2列に長く張られていた。円形テーブルがたくさんあって、それぞれテーブルセッティングがされていた。生演奏、男女の歌手が雰囲気盛り上

げていた。私達の席は新郎新婦の席の間近、お嫁さんの方のご両親がすでに席についている。まずカイルさんのご両親に挨拶。参加者は、女性はそれぞれ着飾っていたが、男性はラフな姿も目立つ。着物では暑いだろうと思っていたが、ミスト入りの大きな扇風機が回っていて、思ったより涼しかった。風も時折吹いて心地よい。参加者への引き出物は、箱入りゆで卵とクッキー、ドライマンゴだった。1時ごろ自宅から歩いて新郎新婦登場。何と二組だった。カイルさんと弟さんの2組の結婚式だったのだ。5人ともそのことを現場で知った。2列のテントはそれぞれの関係者のテントだった。一日王といわれる花婿と花嫁はおとぎの世界の様な素敵な衣装を着て、お付きの者を従え、赤い絨毯の上を歩いて壇上に上がった。そして所定の席に着いた。早速5人で挨拶に行った。初めまして・・・である。二人は結婚後高知に住むことになる。遠く日本からの参加者、特に着物姿は喜ばれた。写真を一緒に撮ってくれと何度も頼まれた。着物を着てよかったと思った。ケーキ入刀、二人からの参加者への手渡しプレゼントは、ビーズの飾りのついたこれまたゆで卵だった。ゆで卵は幸福、子孫繁栄のシンボルだという。料理はケータリングで特別料理かどうかわからなかった。センドルという（グリーンの寒天、豆入りココナッツミルク氷）冷たいデザートはおいしかった。新郎新婦に挨拶し、一緒に記念撮影をし、2時過ぎに私達は失礼したが、お祝いは日本円で祝儀袋に入れてご両親にお渡しした。日本円は新生活を迎える高知で使えることだろう。

ホテルで、着物を脱ぎすて、着がえてホテルのあるプトラジャヤ見物に出た。プトラジャヤは前マハディール首相が、クアラルンプールから政治機能をすべて移して、素晴らしい政治都市を作ったところで、首相府からコンベンションセンターまで一直線の道路を通し、その両サイドに行政機関、裁判所などを配置した新都市で、プトラ大学もこの町にある。首相府前の広場のわきにはピンクモスクが建ち、多くの人が集まっている。丁度この広場を訪れた時、スクールでとても車から降りられる状態ではなかった。それで、農業センターのような所で雨宿り。Oさんがお土産に探していたエビロールもここの売店で探した。よく似た物はあったが、ドンピシ

ヤではなかった。アニさんも4人の子供たちも来ていて、その食堂で、アリフィンさんがやしの実の上を切って、ストローで果汁を吸うものを買ってきてくれてそれぞれ一つずつ飲む。他にオタオタ、サテ（焼き鳥にピーナッツソースをつけて食べる）、パントジョン（お好み焼きの様なもの）を買って持ってきてくれた。お腹が一杯で、私はあまり食べられなかった。

雨が上がりもう一度広場を回ってもらった時は、いい写真を撮ることができた。ピンクモスクに入るには、髪をスカーフで覆わなければならない。持参したスカーフで覆って、アンさんに交渉してもらってやっと中に入ることができた。イスラム教は偶像崇拝ではないので、モスクの中はがらんどう、女性と男性のお祈りの場所が分けられていた。

暗くなってきた、アリフィンさんが写真を撮るのにいいスポットがあると連れて行ってくれたのが、裁判所前。辺りは暗くなっていたが、裁判所や官庁が浮かび上がっていてきれいだった。次にいいスポットは通りの最終地点にあるコンベンションセンター。高い所にあるので、首相府までの一直線の通りが一望できた。理想の街づくりが実感できた。巨額の費用がかかったことだろうが、素晴らしかった。超近代都市がそこにはあった。ホテルに帰って、午前中洋服組が買ってきてくれていた缶ビールで乾杯！

11日は朝7時半にお迎えが来た。世界遺産マラッカ行きだ。途中のサービスエリアでアリフィンさん一家と合流。アニさんの配慮で、Oさんのお土産物がやっと見つかった。よかった。マラッカはマラッカ海峡を望む東西貿易の中継港で、占領の歴史の場所だ。マラッカ王朝→ポルトガル→オランダ→イギリス→日本→イギリス→独立（1957）。オランダ広場、教会、噴水、サンチャゴ砦といろいろな場所で歴史が感じられる。アリフィンさんが派手な装飾の二人乗り人力車トライショーを頼んでくれたので、私はOさんと二人で乗った。マラッカタワーからの景色はすばらしかった。港には大型船も行きかう。ジョンカーズトリートでは中国系の人のビーズ細工のサンダルを買うのを楽しみにしていた仲間がいたので、探してその店へ行った。私は買いはしなかったが楽しめた。

昼はチキンライス（ナシアユム）が食べたいという仲間のために、アリフィンさんが探してくれた店で食べた、おいしかった。ここでの支払いは私達がしたが、あまりにも安くて申しわけないくらいだった。（合計で2000円ちょっと）2時ごろまでいて、ラッシュアワーに入る前に帰ろうということで、ホテルに帰った。夕方また迎えに来るといふ。高級ホテルマリオットで送別会をしてくれるということだった。それまでの間に KI さん、KZ さん、I さんは近くのスーパーへ、私と O さんは帰国の荷造りをした。着物、お土産を入れたトランクや手荷物の重量が気になった。KI さんがホテルで借りてくれたはかりで測ってみたらそれぞれ 23 キロ、5 キロだったのでほっとした。夜は高級ホテルでアリフィンさんのご招待で、アリフィンさん一家、ナジラさん、マストさんと送別の会食だった。マストさんも今年 11 月高知に行くといふ。5 人に同じスカーフと別々のブローチ、またまた飾りつきゆで卵をプレゼントして下さった。ホテルマリオットの料理は素晴らしかった。日本料理店も入っていて、ビュッフェ形式だったので、好きなものが食べられた。マストさんがプレゼントして下さったピンク地のスカーフを 5 人が身に付け、ホテルの豪華な階段で撮った写真は、とても面白いものとなった。

アリフィンさん一家には何から何まで本当にお世話になった。大学の賓客扱い、スケジュール作成・調整、様々な手配、食事のご招待など完璧なホストぶりで筆舌に尽くしがたい。アンさんには女性らしい配慮を随所にしていただきうれしかった。

12 日最終日、午前 8 時発の飛行機で帰国するため、ホテルに 5 時半に迎えが来た。ナジラさん、運転手のヨップさんには最後までお世話になった。特に最初から最後まで私たちにつききりで、買い物にまで付き合ってくれたナジラさんにはどんなに感謝してもしすぎることはない。最後に、このような扱いを私まで受けることになった元である I さんには本当に感謝している。I さんのお陰で素晴らしい結婚式体験、思い出に残る旅行ができて、感激だった。本当に本当にありがとうございました。

(T・H)



雑感

今年の夏は異常気象と言う言葉の中におさまりきれない様な荒々しい天候の日々が続きました。

毎日のように日本中のどこかで大きな災害が起きました。気象庁は7月30日から8月26日にかけて各地にもたらされた豪雨による被害を“平成26年8月豪雨”と名付けました。

突然の雷雨、突風、地震、火山活動は9月になっても続いています。

私の故郷、広島県でも8月20日、信じられない様な土砂災害が起きました。子供の頃から、広島県は自然災害にはあまり縁が無いと思っていました。広島県は7割を山地が占め、土砂災害危険個所が31987ヶ所もあり、日本一多いと知って吃驚しています。知りませんでした。1999年の広島県の豪雨災害を機に制定された土砂災害防止法に基づく土砂災害警戒区域や土砂災害特別警戒区域の指定に向けての作業が未だ行われていない地区だったとのことです。

平野部の少ない広島県での山間部への宅地開発と、脆い地質、想像を絶する雨量が今回の大きな被害の原因とされています。せめて、土砂災害警戒区域に指定される以前でも、危険個所であれば、開発許可を出す際に、もっと丁寧に審査できなかつたのでしょうか。

また、全国的に、合併によって新しい地名が誕生し、昔からのその土地特有の災害を戒めるような地名はイメージダウンにつながるとのことで、明るい名前を選択する場合が少なくないことも、災害に対する警戒心が希薄になると言う人もいます。

安佐南区・北区には多くの友人、知人が住んでいます。特に、最初に報道された安佐南区山本には私の大切な友人が住んでいます。連絡が取れなかつた一週間余り、インターネットを使い出来る限りの情報を集め、大丈夫、と言い聞かせながらも最悪の状態を想像してしまい落ち着かない日々を過しました。やっと連絡が取れた時は安心と同時に無性に腹が立ってしまい、電話口で友人の無事を喜ぶより先に、当り散らしていました。

我が家の友人、知人はみなさん無事でした。

綾でも、7月の終わりから、毎日のように突然ごく限られた地区での一瞬の土砂降りが続き、日照不足で直売所の農産物や玉子が激減しました。9月に入ってから青空は長くは続きません。それでも、十五夜祭(9月7日)、翌日の仲秋、7月12日、8月11日に次いで今年3度目のスーパームーンになった9日は、何とか雲の切れ間からお月様を見ることが出来ました。来月、10月8日の満月は全国で皆既月食を見ることが出来るとのことです。その日が晴れることを願っています。

近年頻発する荒々しい気象変化は、地球温暖化に起因していると、よく言われます。

国連の気候変動に関する政府間パネル(IPCC)は、近年の地球温暖化は、地球が今まで繰り返してきた万年単位の氷期と間氷期という自然な変化ではなく、明らかに人間の活動に由来しているとしています。

この40年間に排出された人為起源のCO₂は産業革命直前から現在に至る260年間の累積排出量の半分を占めると言いますから驚きですが、私が結婚した当時と現在の、世の中の大きな変化を考えると納得できます。

今のまま、温室効果ガスを排出し続けると、取り返しがつかない事態になると警告しています。

産業革命以前の気温より2℃以内の上昇にとどめた上で、今世紀末までに温室効果ガスの排出量をゼロにすれば、悪影響は中程度であるとしています。

エネルギー供給部分に於いては、“近年、再生可能エネルギー技術の向上、コスト削減化が進み、現在では原発は依然としてベースロード電源と位置づけられてはいるが、過酷事故・核廃棄物処理・核拡散などのリスクから、その依存度は減少している。再生可能エネルギーに置き換えることは十分可能。”としています。

エネルギー最終消費部分においては、特に旅客・貨物輸送の増加が、供給部分における削減を相殺してしまうかもしれないと危惧しています。

日常的に、世界中を人や物が行き交う現在、経済成長を阻害するとして各国の思惑次第で、受け入れられないことかもしれません。

速報であるから修正の可能性がある、という注釈も気に掛かります。

特に、“お・も・て・な・し”とかで観光立国をめざし、食料自給率が低く、食料の大部分を輸入に頼っているにも拘らず、日本の食材を輸出しようとしている日本にとっては、都合の悪い文言に違いありません。

各国が自国の目先の利害だけを考えるのではなく、これこそグローバルに地球の将来を真剣に考え、より堅い約束を、より確実に実行していくことが望まれます。

排出量を抑えるだけでなく吸収量を高める為には、光合成に頼る従来の方法では追いつかないとし、IPCC 第5次評価報告書 第3作業部会オットマー・エデンホファー共同議長は、地球を温める温室効果をもたらす大気中の二酸化炭素(CO₂)を地中深く閉じ込める技術 CCS(CO₂回収・貯留)が、不可欠且つ緊急を要するとしています。日本でも、初の実証プラントの建設が始まっています。このプラントは、“活断層近くには作れない。地表や海底に漏れ出ないように、貯留槽の上に密度の高い泥岩などの遮蔽層が必要。”など、地質が複雑な日本に馴染むのかどうか懸念されています。

もともとこの技術は、油田に注入して石油を多く回収する方法として米国で発展してきたと言います。

トラブル続きの、福島第一原発事故後の汚染水を閉じ込める為の凍土壁を思い出します。

成功したとしても、プラントの維持に大量のエネルギーを使うため、恒久的な対策には向かないと言います。それでも、化石燃料依存から脱出するまでの時間稼ぎには欠かせないと位置づけられています。

そんな中、「気候工学」で気候を改造しようと、大真面目に唱える学者もいます。なかでも、主流なのが成層圏に硫酸の粒子状物質を注入して、地球を覆う日傘を作るという考えです。リスクが多い、と批判してきた学者も、近年、「出来る限りの努力をしても、酷い温暖化を止めることが出来なければ、気候工学の危険と、気候工学を使わない危険を自問しなければならなくなる」と述べるに至ったとのことです。

そこまで深刻だとは思ってもみませんでした。

そんな中、わが国の総理は就任から2年足らずの間に47か国を訪問し、

原発、兵器の売り込みを後押しし、集団的自衛権の行使容認を閣議決定したことへの理解を求めて、温室効果ガスをまき散らしながら世界中を飛び回っています。

東京電力福島第一原発は、汚染水問題・汚染瓦礫処理どちらも、問題山積で収束さえしていない状態です。原発を売り込むのは時期尚早です。先ず、福島を真に終息させ、東北を再建し、使用済み核燃料の完全な処理法を確立させることこそ、先行させるべきです。

武器輸出三原則を改め、防衛装備移転三原則を閣議決定したからとは言え、兵器を売り込むことへの違和感は拭い去ることは出来ません。

集団的自衛権の行使が攻撃への抑止力になるとは思えません。現在、多くの国が個別的自衛権だけでなく集団的自衛権行使が容認され、軍隊を保有しています。抑止力となるどころか、諍いを増強させている様にさえ思えます。

地球温暖化など全くでたらめな嘘だと真っ向から反対する学者もいます。

私には、どちらが正しいのかは判りません。

でも、今、人間の身勝手から、絶滅してしまった種、絶滅が危惧されている種が年々増えていることは事実です。

海に流れたプラスチックごみなどからのマイクロプラスチックの海洋生物への悪影響が広がりつつあると言います。

安全だと言われた殺虫剤、ネオニコチノイドの影響も心配されています。

原発事故の影響が疑われる渡り鳥の異常も見つかりました。

普天間基地の負担軽減の為の移設先として国が埋め立てを予定している辺野古の海はジュゴンやサンゴの生息地として知られ、サンゴのかけらをとりこんだ珍しい石筍が見つかり、魚介類などの新種も続々と発見されています。“ジュゴンやサンゴなんか居なくても日本の安全が保障されれば良い。ジュゴンだ、サンゴだと騒ぐのは情緒的すぎる。”と言いつつ著名人の発言に耳を疑いました。彼は、他の番組では生物多様性の大切さを語っていたのに、です。

ビニールハウスではアブラムシの天敵としてのテントウムシを品種改良して、飛べない個体を作り、利用することになったと言います。

幼稚園児が近くの休耕田に作られた池にメダカを放流したことが、微笑ましいニュースとして報道されました。何故、メダカが居なくなったかを子供と一緒に考え、時間をかけて、メダカが住むことが出来る環境を作っていくことの方が大切なのでは、と忘れてしまいました。

中村桂子氏：「科学で解明されていることは、ほんの少し。私達はいきものの一部であることを忘れてはならない。これからの生活は、めんどろを引き受ける覚悟をすること。」

涌井雅之氏：「西アフリカのエボラ出血熱の猛威、感染拡大はある意味、人為的に引き起こされたこと。奥地の乱開発がエボラウイルスの宿主であるコウモリの棲家を奪った。都市部は人や物の移動が激しい。封じ込めるのは極めて困難」

我が家のギンヨウアカシアの枝には無数のキチョウの蛹がぶら下がっています。蛹化の終盤、羽化の最後、力を振り絞って身をよじらせて変態の過程を成し遂げようとする様は、見る度に感動します。途中、幼虫や蛹が捕食されたり、羽化の最終段階でカマキリに捕えられたり、命を全うすることの大変さを痛感しています。

“第4回綾の自然と文化を楽しむ”（綾歩き）、でサネカズラの花を教えて頂きました。サネカズラの紅い実は我が家のすぐ傍で、毎年秋に見ていましたが、花を見るのは初めてです。先生のおっしゃる通り、蠟梅の様な可憐な花です。帰宅後、毎年、実を見ていたところに行ってみました。有りました。沢山の蕾と花がひっそりと葉陰に咲いていました。それから毎日、見に行っています。10日目、実がずいぶん大きくなっています。

小さな白いカザグルマの様な花を咲かせるテイカカズラに、想像もできないほどの大きな豆が出来ることも知りました。これも、初夏の頃、近く

の斜面に沢山咲きます。見に行くと、20 cmほどの豆が2個ずつ出来ていました。豆を日当たりの良い所に乾しておくと、中から種が飛んで増える、と聞きましたので、1対貰ってきました。そういえば、この豆は、裏の木立でぶら下がっているのを見たことを思い出しました。木立の木々に隠れるように咲いていたノフジの豆だと思っていました。

日課となった、サネカズラ見物に出かけると、少し奥まった所にヒガンバナが咲いていました。そこへ、モンキアゲハが群れでやって来て、我先に、蜜を奪い合っていました。

その先の坂の上には一番遅くに花を付けると教わった、シリブカガシが満開でした。もう少し近くで見たいと思って登っていくと、小さな花の集まりにイシガケチョウがやって来てくれました。いつもは裏の木立に沢山やって来るのですが、今年はあまり見かけなかったのが幸運でした。イシガケチョウが去った後にはツマグロヒョウモンもやってきました。

サネカズラ見物のついでに、私の住む班のはずれまで足をのびました。先日、車からアマサギの群を見たので、逢えるかもしれないと思ったのです。いつもは、この時期首筋から胸にかけて橙色の羽のサギは見たことが無かったので、逢えることを願って歩いてみました。残念ながら、アマサギはおろか白いサギにも逢えませんでした。田圃を縁どるようにシロバナサクラタデがオモダカと一緒に咲いていました。我が家のすぐ近くでも、数本は見る事が出来ますが、これほどの群落に出逢ったのは初めてでした。シロバナサクラタデの自生地を含む綾歩きは、来月の予定ですから、一足先に本当に幸運でした。

昨年我家の庭に、白黒の水玉模様のベストを着ているようなカバマダラがやって来ました。カバマダラの食草はフウセントウワタと知り、調べると、近所の庭先に有りました。梅雨の頃、紫がかった白い花を咲かせ、夏にはハリセンボンの様なトゲトゲの黄緑色の、小さな花からは想像もできない様な大きな実を付け、最近弾けて中から綿状のものに絡まった黒い種が現われました。花も、実も、種も、初めて見ました。

白血球が極端に少ないと言われながら、風邪にもインフルエンザにも無縁でいられるのも、こんな毎日のワクワクのお蔭だと感謝です。(K.O.)



お知らせ

* 10月例会は、10月29日水曜日
朝8時半中央公民館出発 石鎚ふれあいの里へ、

10時～「大保木の小道を歩く」1時間半ほど歩きます 500円
お昼お弁当を頼みます 700円
午後「こんにやく作り」を体験します。800円

* 合計個人負担2000円です。

* ぐらしの学習会では、随時、会員を募集しています。

活動会員 2,000円/年 購読会員 1,000円/年
振込先口座番号 (郵便局) ぐらしの学習会 01610-5-21026

問い合わせ先 TEL/FAX 089-964-6956
E-mail: kt-hayashi@nifty.com

井戸端だより86号の訂正をお願いします。

1	18ページ	T. Mさん→T. Hさん
	21ページ	Sa. Kさんは 22ページ へ
2	編集後記	オジイサンガエル → オバアサンガエル

編集後記

親しくなった友人との別れの時が迫っている。共に過ごした時間を振り返ると、込み上げてくるものがある。毎週土曜日、午前中は、彼女と過ごした。9月27日、彼女は家族とともに、インドネシアへ帰国する。

出会ったころは、控えめな人見知りをする女性だった。ご主人の希望で日本語の勉強をしているという感じだったが、2か月経った頃には、日本の生活に慣れ、彼女の表情も和らいで、日本語習得にも熱心さが出てきた。日本語力がだんだん伸びてきているのを目の当たりにすると、パートナーの私も力が入るようになっていた。

あれから、3年半。毎週土曜日の日本語レッスンは終了になる。

皆様、87号は如何でしたか。
ご意見等ございましたら、お聞かせください。



(M・T)